daily コラム

2026年9月3日(木)

〒140-0014　品川区大井1-7-6ＴＨビル2階
ＭＭＩグループ　ＴＥＬ　03-3778-2311　ＦＡＸ　03-3778-2317
Email　dailycolumn@m-m-i-g.com

今や入退室管理に留まらない！「入退室管理システム」の耐用年数

「入退室管理システム」の耐用年数は？

最近、オフィス向けの「入退室管理システム」が大きく進化しています。スマートフォンや顔認証による非接触化、勤怠管理システムや防犯カメラとの連動、クラウド上の一元管理ができようになりました。

国税庁ＨＰの解説によると、入退室の遠隔監視や扉の施解錠を行うドア自動管理装置は、「器具及び備品」「事務機器及び通信機器」に属する「インターホーン及び放送用設備」として、耐用年数6年を適用するとされています。

「インターホーン」でいいのかな？

ここでいう「インターホーン」は、実は和製英語。英語では intercom と呼ばれます。起源は19世紀後半のドアベルにさかのぼり、大きなビルや工場、旅館内の構内連絡や来訪者確認のために発達してきました(アイホン社の顧客第一号も旅館だそうです)。その後、双方向通話が可能となり、病院のナースコールや住宅用ドアホンへと用途が広がっていきます(昭和36年の耐用年数表には、既に「器具及び備品」「共通的使用資産」に「インターホーン」として耐用年数10年の記載があります)。

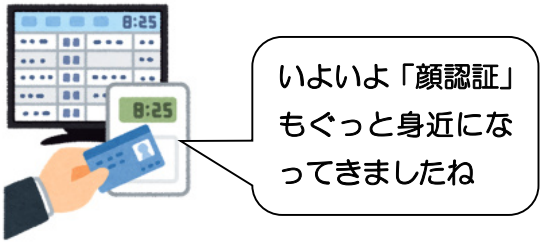
さらに、警報機能や映像確認、遠隔施錠などの機能が加わり、現在のシステムへと進化しています。このような経緯から、「入退室管理システム」を「インターホーン及び放送用設備」と整理することについて、違和感は少ないのではないかと思われます。

「入退室管理システム」の資産区分

実務では入退室管理システムの構成要素ごとに資産区分を行うことが多いようです。

項目	区分
ドア制御装置 本体制御盤	器具備品（6年）
カードリーダー 認証端末	器具備品 （5年又は6年）
受付・管理用ＰＣ	器具備品（4年）
管理ソフト	ソフトウェア（5年）
配線・電源工事	建物附属設備 （構造・用途等による）

なお、セキュリティや監視カメラと一体で工事される場合は、資産区分を明確にした内訳書を整備し、説明可能な状態にしておくことが重要です。また、建物に固着し不可分な設備である場合には、建物又は建物附属設備の「ドア自動開閉設備」(12年)として取扱われる場合もあります。



補足と解説（お客様へは１ページ目だけを送付してください）

国税庁　質疑応答事例　ドア自動管理装置の耐用年数

https://www.nta.go.jp/law/shitsugi/hojin/05/09.htm

【引用】

【照会要旨】

入室の遠隔監視、扉の施解錠等を行うためのドア自動管理装置（取得価額約 100 万円）の耐用年数は何年ですか。この装置は、監視用カメラ、モニターTV、インターホーン、制御器、プリンター及び操作表示器から構成され、これらが一体となって機能するものであり、同装置一式で販売されています。

【回答要旨】

減価償却資産の耐用年数等に関する省令別表第 1「器具及び備品」の「2　事務機器及び通信機器」の「インターホーン及び放送用設備」の 6 年を適用します。

【関係法令通達】

減価償却資産の耐用年数等に関する省令別表第 1

耐用年数表より抜粋

＜器具備品＞

構造・用途	細目	耐用年数
事務機器、通信機器	電子計算機 パーソナルコンピューター（サーバー用のものを除く） その他のもの	 4 年 5 年
	複写機、計算機（電子計算機を除く）、金銭登録機、タイムレコーダーその他これらに類するもの	5 年
	その他の事務機器	5 年
	インターホーン、放送用設備	6 年
	電話設備その他の通信機器 デジタル構内交換設備、デジタルボタン電話設備 その他のもの	 6 年 10 年
光学機器、写真制作機器	カメラ、映画撮影機、映写機、望遠鏡	5 年

昭和 36 年の耐用年数表（第一法規コンメンタールより）

別表１　機械及び装置以外の有形固定資産の耐用年数

種類	構造又は用途	細目	総合耐用年数又は個別耐用年数
器具及び備品	共通的使用資産	テレタイプライターその他の通信用機器，タイムレコーダー，消火器，サイレン，ブザー，インターホーン，放送用機器（有線放送電話機器を含む。），ラジオ受信機（接客業用又はクラブ用のものを除く。）及びテレビジョン受像機（接客業用又はクラブ用のものを除く。）	10 年

アイホン株式会社ＨＰ　アイホンによってのお客様第１号は旅館！？（2022/12/14　商品ピックアップ）

https://www.aiphone.co.jp/products/business/bizpark/2022/12/000994.html

【引用】

インターホンといえば住宅を思い浮かべる方が多いと思いますが、アイホンのインターホンの歴史は意外にも"旅館"での採用から始まりました。今回は、アイホンの「原点」についてご紹介いたします。

お客様第１号

お客様第１号は 1951 年（昭和 26 年）１月にご採用いただいた、当時名古屋駅前にあった「むさしや旅館」になります。今から 71 年も前のことです。

意外にも最初にアイホンのインターホンが設置された場所は"旅館"でした。当時、６畳の下宿部屋の家賃が月３千円の時代に、インターホンは１万数千円もする大変高価な物でした。インターホン自体一般家庭はおろか業界でもその存在を知る人は少なかったといいます。しかし、朝鮮戦争勃発を機に景気が急速に上向いてきた世相を背景に、名古屋駅前の旅館は予約なしでは泊まれないほどの盛況ぶりでした。連日、満員のお客様を抱え、帳場と客、帳場と女中さんは頻繁に、効率的に、連絡を取り合う必要があります。そこでインターホンの需要が生まれ、ご採用へとつながりました